

特集一 蛇穴治夫新学長にインタビュー

地域に必要とされる

人材を送り出したい

く新学長が語るこれからの北海道教育大学の姿く

■大学のビジョンに迫る

Q 五つのキャンパスへの思いを教えてください。

教員養成の三キャンパス（札幌・旭川・釧路）は、それぞれの特色をもって独自の道を歩んできました。ただ、北海道教育大学という一つの看板のもとでは、共通してやらなければいけない事がはっきりしています。教員として必要な力をもった人間をしっかりと育てる事が現場からの要請だと思います。そのような求めに応えるため、教員が丸となって学生を教育するという事が、この三つのキャンパスにおいては重要だと思っています。つまり、本学が北海道における教員養成の拠点大学であるという事を自覚し、それを実質化していくのが大きな仕事の一つです。そのために、カリキュラムをこれまで以上に実践的なものにする改革を進めているところです。

その一環として、教育委員会や学校などのステークホルダーからの声を取り入れる仕組みを作ろうとしています。それを実現することによって、社会や学校現場が必要とする人材育成をしっかりとやっていきたいと思っています。これまでもアクティブ・ラーニングの要素をもつ授業は行われてきたと思いますが、大学全体で実践的なカリキュラムに転換していくために、必修の科目としてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を開発しようとしています。どこの学校にも起こりうる課題、例えば、授業でのつまずきとか特別活動への対

応とか特別なニーズが必要な子に通常学級でどのように教育していくかとか、そのような課題を取り上げます。それらがどういう背景で出てきたのか、どのように解決すればよいのかを学生にグループ討論させ、ある程度のまとまりができたら発表し合うといったものです。その時に、附属学校や公立学校の協力を仰ぎ、双方向遠隔授業システムを使ったりリアルタイムでの授業観察と、授業者と学生の意見交換・討論などを授業の中に組み込むことにしています。

つまり、その学校の授業が、大学に配信される訳です。また、特別活動などの様子も大学に送られます。双方向ですので、授業が終わった後に担当された先生へ「あの場面ではどのような意図があったのか」「ここではどうしてこのような教材を使ったのか」などを学生側から質問し、お答えいただくという討論も組み込んでいこうとしています。

今年度中には附属・公立の先生方と、どういう授業をどういう風に展開していくかを綿密に打ち合わせ、来年度試行してみます。



改善後、二十九年度から本格実施の予定です。

今年度から新しいカリキュラムで学ぶ学生が入ってきましたので、彼らが三年生になったらこのアクティブ・ラーニングの授業を受けることとなります。

もう一つ、教員養成の改革として、教育実習に行く前に基礎的な知識・技能が身に付いたのかを確認する検定試験のようなものを開発しています。「教育実習前CBT（コンピュータ・ベース・テストイング）」といいます。これは、医学部で臨床に出る前に行っているのと同じような事をできないだろうか、前学長がかなり以前からお考えのものでした。それをこの度、愛知教育大学・大阪教育大学・東京学芸大学と本学がプロジェクトを組んで開発しています。現在、試行できるところまで問題数が揃いました。学生に一定程度の点数を取るまで何回も受けてもらうことができ、その都度、意図を変えずに別の問題が出題されるようにできます。そうすることで、現場でこれは知らないと困る法律的な事柄や教科に関する知識などが身に付いた上で実習に参加することになるでしょう。同時に、コミュニケーション能力や実習に向けての意識など、学生が自身の準備状況を知る診断的なアンケートも併せ持つものになっています。

岩見沢キャンパスは、二十六年度から「芸術・スポーツ文化学科」となりました。文部科学省と話を進めるときに、二つの新聞投稿を紹介しました。

まず、高校三年生女子の「音楽大学を目指していたが、東日本大震災を経験し、水や食料などと違い、人が生きていくのに音楽は必要なのか悩んだ。しかし、その後、被災地に赴いて演奏活動をする

方が多くいて、音楽が人と人とを繋ぎ、一体感を生んで人を元気づけると感じた。音楽は生きる希望になるのだ。」という内容の記事です。続いて翌週、四十代の女性が、その高校生の投稿へ返信する形をとった投稿、「自分は娘を亡くした。娘の好きだった音楽を聴くと、初めは悲しくて聴けなかったのだが、だんだんその音楽に支えられている・癒されているように思う。音楽はそういう力をもっているのだ。あなたの選択は間違っていない。」という内容の記事です。

岩見沢で作ろうとしている学科の一面を表していると思いました。全員が芸術家になるという事ではなく、例えば音楽好きがどういう場所で力を発揮できるのかをきちんと教育すれば、いろいろなところで活躍できます。少子高齢化・過疎化が進む中、地域を元気づけなければなりません。

電車や建造物に大勢で絵を描くことだって、描く人・見る人の一体感を生みますよね。

スポーツも同じです。老若男女や様々な格差を超えて人々をつなぐ力を芸術やスポーツがもっているということを学生に教育します。そういう説明で文部科学省に認めてもらいました。

函館キャンパスは、「国際地域学科」という名前です。現在は中小企業であっても海外への出張や派遣が珍しくないそうです。国際



的な感覚を身に付けながら英語力も併せ持ち、いつでも海外に飛べるといふ気構えをもった学生を育てたいと思っています。函館市はご存知の通り、国際化した都市の先駆けでもありますし、水産に加えて観光業にも力を入れています。函館という地域を研究のフィールドとして捉え、同じような条件や規模の街で、おそらく似たような経済の課題を抱えている所は日本にも、世界にもたくさんあると思います。ですから、それらの地方の事例を学びながら、まず函館の課題に取り組むという、これも実践的な力を付ける学科にする事を文科省に説明してきたところですよ。地域学を中核に据えて、その中に国際的な感覚と英語力、コミュニケーション能力を身に付けるカリキュラムを行う学科です。それぞれで教員養成をしていたものがこのように変わるので、全員一丸となって進めていきます。

Q 大学と学校現場との目指す関係は？

本学の新任者研修会では、新採用の大学教員に真っ先に「北海道教育大学が地域に期待されている事は？」と聞くようにしています。それはこれからご自身が大学で何をするのか、研究と教育と学生指導の中で、どういう力を発揮するべきなのか、改めて考えていただきたいからです。教員養成系の大学の先生というのは、多様な学部から来ています。これは他の学部ではあり得ません。腰を落ち着け、教員養成のための研究とは何かを考えていただくためにもお尋ねしています。各学部からいらした先生は一流の研究者です。その方に教員という人材を養成するカリキュラムの特定の役割をお願いすることになります。歯車がすべて噛み合わないと教員養成は成功しま

せん。担当していただく講義科目のみの依頼ではなく、自分の講義が他の講義とどう噛み合うのか、例えば教科専門の講義であれば教科教育との関連も意識して、ご自身の講義もどんどんヴァージョンアップしていただきたいと願っています。

また、大学の教員には、必ず学校現場を知っていただきたいと考えています。これについてはそのための仕組みを作りました。新任者は全員、附属学校での研修を義務化しました。次年度より第三期中期目標期間に入りますので、その六年間で現教員にも改めて学校現場を経験していただく研修プログラムも、ほぼ完成しています。ご自身の専門の研究を進めていただきながらも、学校教育にかかわる研究も行い、教員養成学部をしっかりと創り上げなければなりません。学校も大学も子どもの成長を促すという同じ目的を共有していますので、今後ますます協力していく必要があります。

もう一つ、中教審査申などでは「学び続ける教員」という言葉が頻繁に出てきますが、先生という職業はそういう宿命なのだ、という思いがあります。かつての優れた教育技術が現在では通用しないということもあるでしょう。



また、世の中の課題もどんどん複雑化してきています。子ども自身にもアクティブ・ラーニングが求められています。

ですから、養成する側もそれを踏まえると、卒業させておしまい、という時代ではないと思います。「学び続ける教員」に対する学びの場と機会を大学が提供しなければならぬ時代であると考えます。学生用と現職の先生用の両方のプログラムをしっかりとつという点からも学校とのつながりはますます深まると思っています。

教員免許状更新講習の充実も考えていかなければならないですし、教員の研修を大学院の授業レベルにして単位化できれば大学院に必要な単位の半分ぐらいは外での研修で取ることができます。そうすると就学の年限も短縮できますし、本来の研究的視点も鍛えられます。また、今後は博士課程について取り組まねばならないと考えています。大学で教員になる人を育てる事です。教員養成系学部のみが、他学部に頼っている状況です。自らが大学で教鞭をとる人材を養成する事もしていかななくてはけません。様々な学部から人が来るという多様性の良さもありますが、長い目で見ると、現職の先生の中からも後輩を育成する人が出てきてよいと思っています。

Q 教員養成のために必要な事は何ですか？

平成二十五年度に国が国立大学のミッションを再定義しました。それを踏まえた運営・経営を進めないと資金面にも影響が出てくる時代ですので、しっかり応えていかなくてはなりません。ミッションには就職率などの数値目標も含まれています。社会から求められ

ている教員を養成する事、現場から求められている課題に研究的に
応えていく事が大切だと思っ
ます。

もう一つ「グローバル教員養成
プログラム」を始めています。

TOEIC(国際コミュニケーション英語能力テスト)を受検させ、五三〇点以上獲得した学生を対象にしています。通常の卒業要件の単位を超えた部分で、英語に関わる授業・国際感覚を養う授業など、指定のものを受講してもらっています。英語専攻の学生に限定はしていません。二十七年度は、一〇七名が申込み、三十五名が受講を許可されています。そのうち英語専攻は二十二名です。これからは小学校でも外国語活動が三年生から始まりますので、小学校の先生も英語力が必要な時代です。また、社会もグローバル化していますからその観点から子どもを指導していく事も求められます。これをベースにしなが



中教員双方とも英語力を付けさせるプログラムを用意しなければならぬと考えています。

ただ、私もそうですが、中学校・高校・大学と英語を勉強すれば自在にコミュニケーションが取れる、という訳ではありません。

単に英会話のような内容を今のプログラムに詰め込んでもパンクするだけです。ですから、どうしても卒業要件の外の部分で行っていかなければなりません。学生に自学自習を促すことが必要になってくると思います。

そのためのインフラとして、例えばeラーニングシステムのソフトを大学で整備していつでも使えるようにしたいと考えています。

また、北海道が行っているイングリッシュ・キャンプなどのボランティア活動も、プログラム修了の要件にしています。修了のレベルも、TOEFL iBTの九十二と、かなり高めに設定しています。

札幌の学生が、受講許可者の上位を占めています。

Q 現在の学生たちに期待する事は？

大人は大体、かつて自分が経験し後悔している事などを学生に対して言うてしまうところがあります。これもお節介かもしれませんが、学生時代はともかく勉強だと話しています。友人や先輩と語り合う事は確かに大切です。学ぶことも多い。ただ、教員志望の学生は多岐に渡る勉強をしなければなりません。

学問というのは体系があって、それをじっくり学ぶ時間は、学生時代を除いてはないと思います。ある学問を一口で言えるぐらいまでは頑張っしてほしいのです。勤め始めたならそんな時間はなく、やら

なければいけない課題が積み重なっていくだけです。広く学ぶチャンスは学生時代にしかありません。いろいろやりたい事はあるでしょうが、その中の一つはやはり勉強だと思ってもらいたい。

教員になろうと思って入学してきた事を今一度思い出してほしい、とも伝えていきます。入学試験の面接では「良い先生に習ったから」「自分もそんな先生になりたい」という答えが返ってきます。それは実際そうだと思います。自分の親とは違う大人に、親とは違う観点で育てられた、そしてその大人はいろいろなことを知っていて、ものすごく分かり易く話してくれる、尊敬できる大人だと思っただしょう。自分の親に言えない事も話したりした覚えがあると思うのです。そういう大人（先生）を朝の八時から三時ぐらいまで見て育ち、ああいう人になろうと思ったのではないか、それを思い出してほしいのです。そういう人になるために、何をしなければならぬのか、です。子どもが苦手な学生もいます、うまく話せないとか。でもそれを苦にするな、とも言っています。私自身もそういうところがあったのですが、結婚して自分の子どもができる、全く変わってしまいます。始めは、ぎこちないかもしれないが一つの試練であり、自分に足りない事をじっくり考えるチャンスと捉えてほしいと思います。教育学・心理学などでは、子どもを学問的に捉えます。それを基礎として子どもと対面するわけですが、現実の子どもは一人一人違います。基礎を踏まえながらも事例の積み重ねというものが必要です。現場に出れば、自分を鍛える時間はいくらでもあります。そして鍛えると必ず自信がついてくるのです。だから自分の将来を早々と決め付けず、学生時代は子どもと触れ合っただけの基礎的な勉強をしてほしいのです。

Q 全道・全国で教職に就いている卒業生に期待する事は？

今述べた学生への話にもつながるのですが、先生として頑張る姿が、次の世代を育てる原動力になります。ですからそんな姿を子どもに見せてほしいと思います。教職というのは、自分の時間を確保しにくい、大変な職業です。やらなければならないことが多岐に渡っ

ている上に部活動の指導などがあると、休日もままならない、本当に大変です。

教師はカリキュラムだけで子どもたちを教えているわけではなく、まさに人格そのものを通して人を育てるといふ尊い行為を一生懸命やっている人たちなのだ、という事を見せていただければ、という思いで一杯です。

■ 蛇穴学長のお人柄に迫る

Q 少年時代はどのようなお子さんでしたか？

僕は青森県の弘前市出身です。サラリーマンの息子でしたが、農家の子どもたちと放課後はよくリング畑を走り回っていました。

当時は、ある時季に一齐に農葉をリング畑に撒くんです。その時は一面、木も葉っぱも緑色に染まってしまいます。今考えるとすごい量の農葉だった気がしますが、そんな場所が遊び場でした。

当時、僕が住んでいた家は市営住宅に囲まれていました。その住宅にいったい友達がいるんです。学年の違う子もたくさんいて、上の学年から下の学年まで一緒に遊ぶというのが普通でした。上の子がかけてこや缶けりなど、いろいろな遊び方を教えてくれました。それを僕らも下の学年に教えていました。夏場は本当に走り回るだけでした。冬は、弘前の地形が結構アップダウンのある町でしたので、家からスキーを履いて、ちょっとした斜面のある所に行って毎

日滑ってました。当然リフトなんかないので、滑り降りたら自分の足で上がるという繰り返しでした。それでも楽しかったですね。

子ども時代は、夏は走り回る、冬はスキーばかりで、だから基礎的な体力はある程度つきました。

親は「勉強しなさい」ということは一言も言いませんでした。だから転校生が来るとビックリしました。長万部とか、炭鉱の町の赤平や北見といった北海道からの転校生が多かった気がします。

彼らは北海道でも決して都会っ子ではないのですが、こういうわけか垢抜けて洗練された感じに見えました。転校生は僕らがこれから勉強するような事をもうわかっていて、「すぐく頭がいいな」と思いました。教科書の他に参考書と問題集を持っていました。それを見た時には開いた口がふさがらない、というか初めて見てびっくりでした。こんなに勉強している子どもがいるんだという驚きでした。だからといって真似はしませんでした。というか真似できるだ

けの経済的な余裕もありませんでした。余計なもの（参考書や問題集など）を買ってくれる家ではなかったので、僕はひたすら教科書を一生懸命勉強するだけの子どもでした。

次に中学校ですが、最初の担任が吹奏楽部の顧問で、クラスの何人かと「お前ら練習見に来い」と直接声がかかり、放課後連れられてくれたのを覚えています。僕は小六のころに縦笛が好きになって、音楽が好きだったという下地があったので、吹奏楽部がなかなか面白そうに感じて入部しました。

入部後、楽器を何にするかということになって、トランペットが一番花形でやりたかったのですが、人気があってもう定員がいっぱいで、余っているのがチューバとトロンボーンだったので、チューバは僕の体では重過ぎるなと思ったので、トロンボーンをやることになりました。吹奏楽には打ち込みました。

授業が終わるとすぐ部室に直行し、楽器を出して練習して帰る頃には真っ暗でした。

僕は部活のおかげで友達もできたし、中学校時代を楽しく過ごせたなと思っています。

小六の一年間だけでしたが野球もやっていました。小さい小学校だったので、ちょっと体が動かせると野球部に来いと呼ばれました。野球部は毎日練習がありました。ポジションはセンターで、控えのピッチャーでもありましたがピッチャー



としての登板の機会は一度もありませんでした。実は、中学校の時にも真っ先に野球部を見学に行ったのですが、担任の顧問に吹奏楽部に入れと言われて入部してしまったのは、先程話した通りです。しかし、野球部の試合の時は応援団と吹奏楽部だけは行けたので、ラッキーでした。特にトロンボーンとトランペットだけは予選の段階から行けたので、僕は授業に出ないで野球も見れたし、応援もできるのが一番楽しく、トロンボーンを選んでよかったなと思っていました。部活の思い出ばかり語りましたが、勉強もそこそこにはしていました。結果的には弘前市内では一番の進学校である弘前高校に入ることができました。

Q 高校や大学の学生時代はどのような学生でしたか？

トロンボーンは弘前高校でも三年間続けました。今は規模が大きくなったみたいですが、弘前高校も規模の小さいバンドでした。

しかし、高校は大学受験が目の前に控えてくるので、中学校の時のように毎日取り組むことはありませんでした。

その後、僕は北大に入り、（先輩がいたこともあり）オーケストラを訪ねてみたのですが、レベルが全然違いました。僕のトロンボーンのレベルではついていけないということがわかり、入部は諦めました。だから教養の時はおっぱら家



と大学の往復でした。

なぜ北大にしたかという点、当時の北大は文類と理類という大括りで入学することができたので、十八歳で何を専攻するか決めかねていた僕にとっては好都合でした。

僕は高校時代に有機化学が好きだったので、北大の理学部か、薬学部にと思って理類に入ったのですが、いろんな講義に出ているうちに生物学、特に動物学の先生の話が面白くて、生物学に興味をもちました。高校の生物はやたらと板書が多くて、言葉を暗記させられて、試験では書けなかったら終わりという授業だったので、大学に入ってみたら全然違って、「なぜ」と考える授業でした。

地球上に多様な生き物が生きているが、全ての生き物に共通することがある。つまり、細胞からできているという共通性があるのにこれだけ多様性があるのは一体何故なんだ？と考えることから始まりました。そこで生物学について目を見開かされたのです。

もう一人の先生は動物発生学という分野で、一つの受精卵が細胞分裂をし、さらに細胞が位置変化を起こし、移動し始めることによって細胞分化が起こり、一つの細胞から多細胞という複雑な個体が出来あがるという講義でした。その二つの講義を聞いて、生物学を真剣に勉強してみようと思ったのです。

しかし、学部の仲間は、もともと生物が好きで入ってきていて、僕だけが大学に入ってからでしたので、何歩も遅れたスタートでした。部活をやっている場合ではなく、学部に移行してからは、手を抜くと置いていかれるので本当に真剣にみんなのレベルに追いつこうと、かなり勉強しました。

Q 大学に勤めてからの思い出は？

生物嫌いからスタートして、大学で勉強したことが結果的に教員養成のこの大学に赴任して、学生教育の上では役に立ちました。

つまり生物が嫌いな学生に好きになってもらうためにはどうしたらいいのか、教養生物学、細胞学、動物学概論を講義する時に役立ちました。

あと日頃から学生には「自慢したがりに屋になれ」と話しました。自慢するためにはネタ（きちんとした知識）を集めなければならぬからです。最初はネタのための雑学を集めることから始まり、いろいろな本をきちんと読んで、ばらばらの雑学だったものが繋がって、そしてそのネタはきちんとした一つのストーリーをもった知識になり、子どもたちにも話せるようになるから、自慢したがりに屋になってくれと話しました。

僕自身は、教育大学でもとてもいい学生に恵まれました。十月に赴任し、半年間は講義も実験もしなくていい、学生も持たなくていいから翌年の四月からの準備をしない、と上の先生から言われました。赴任した時はゼロからのスタートで自分のゼミの学生がいないのは当然だと思っていましたが、別な先生のところの学生で二年生と三年生が二人ずつ、四月から僕のところに移ってきました。僕がどんな人間かわからないし、どんな卒論テーマを与えるかもわからないのによく来たものでした。最初に来たこの四人がゼミの雰囲気全部つくってくれた学生だと思っています。僕は理学部から来ましたから、教員養成学部がどんなところかも知りません。

この四人が教員養成大学はこういう大学でなければいけないので

はないかということを考えるきっかけを与えてくれました。そのきっかけの一つは、お酒を飲んでいるときに「先生も結局五年くらいしたら、北大とか違う大学に行ってしまうんじゃないよ。」と言われたことでした。僕は結構この言葉はショックでした。理学部出身の先生はどうせどこかに行ってしまうのだという風に見ていたのです。

自分は初めて赴任した大学だったので、ここで一生懸命教えようと思っただけで、卒業のテーマはどうしたらいいのか、今教えている講義の中身はこれでいいのか、などその学生たちと話をしました。そういう経験と学生との会話が、のちの自分をつくったベースになっています。

旭川校に赴任をして、半年後に来たこの四人の学生の影響が非常に大きかった、忘れられない思い出です。

今では五十歳過ぎになってこの四人とはメールとかのやり取りが続いています。最初に卒業した一人は小学校の校長先生になっていますし、もう一人は札幌東高の先生で、管理職になるように言われているようです。その下の学年の二人は旭川と札幌の小学校で教えています。



Q 現在のオフタイムはどのように過ごされていますか？

旭川校にいるときは、音楽好きな理科の先生と数学の先生合わせ四人の仲間でもリコーダー・アンサンブル演奏をしていました。この四人でちゃんとソプラノ、アルト、テナー、バスのリコーダーを揃えていました。素人集団でしたが、公民館や定年する先生のパーティーなどで時々演奏していました。ギターも演奏していましたが、今はやめてしまいました。

家にいるときは昨年までは札幌の仕事を終えると、金曜の夜には旭川に帰り、土日は一日中、愛犬とゴロゴロしたり散歩したりしていました。僕は犬好きで三歳から犬を飼っていました。結婚して子どもができ、子どもが犬を飼いたいと言うので、ペットショップに行ったりと、かわいい犬を見つけてしまい飼うことになりました。ミニチュア・ダックスフンドでした。しかし、十年目に病気になり、亡くなってしまったので、今は散歩にも行けなく寂しい限りです。

また、今は娘も息子も独立してしまったので、カミさんと二人で買い物に行ったり、本を読んで過ごすぐらいでしょうか。

お酒も飲みます。父親が酒が強くて、その遺伝子を受け継いでいるのか僕も強い方かもしれません。歳と共に飲む量は落ちてきましたが、学生ともほとんど飲んでいました。素面では立ち入って話すことができない人でも、お酒を飲んで打ち解けてみると実際に相手の考えていることがわかったりして、友



だちの関係も広がりました。お酒に救われたことの方が多かったか
もしれません。二日酔いで大変なこともありましたが、そんなこと
があっても飲み続けている訳ですから、結局は良かった面が多かっ
たということです。

Q 大切にされている「座右の銘」は？

特にはないのですが、性格上、「与えられたことは誠実に取り組
む」ことにしています。自分の能力の範囲でできることはきちん
とやり遂げることが大切だと思います。大学の理事になってからは、
学部・学科をどうするかが大学改革のテーマでした。文部科学省と
の話し合いの中で「なんでそんな学科を作らなければならぬのか」
「そのニーズはどこにあるのか」と言われましたが、一つ一つ時間
をかけて説明を積み上げて解決してきました。

そうした取り組みを考えると、自分が人に言える座右の銘は
「誠実に物事にあたる」ということだと思います。

【蛇穴新学長略歴】

昭和三十一年六月十八日生まれ
弘前市立桔梗野小学校卒業
弘前市立第四中学校卒業
青森県立弘前高等学校卒業
北海道大学理学部生物学科卒業 同大学院博士課程修了
昭和五十九年 北海道教育大学教育学部旭川分校 助手
昭和六十三年 同 助教授
平成十七年 同 教授
平成十九年 国立大学法人北海道教育大学 理事
平成二十七年 四月 同 副学長
平成二十七年 十月 同 学長

平成二十七年八月十一日（火）北海道教育大学にて

取材・構成 鈴木 康裕（西岡中） 菊池 浩樹（栄南中）

打矢 伸介（手稲中央小）